

平成 21 年 3 月 16 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006-2008 年度  
 課題番号：18710206  
 研究課題名 (和文) 東アフリカ小農による内発的発展の特徴とその地球的意義  
 研究課題名 (英文) Endogenous Development of East African Peasants:  
 Characteristics and its Global Value  
 研究代表者  
 阪本 公美子 (SAKAMOTO Kumiko)  
 宇都宮大学・国際学部・准教授  
 研究者番号：60333134

研究成果の概要：タンザニア南東部の農村調査の結果、貨幣の重要性が増加する中でも自給自足的側面を維持しつつ、相互扶助関係が機能し続けていることを明らかにした。調査地のみならず多くの東アフリカの農村では、生活空間を基盤とする住民組織やコミュニティを主体とし、生存を主眼におく再生産活動を、生産活動と密接に関わらせながら重視している。地域的な食料生産の失敗、コミュニティ内における男女の非対称性、母系的社会の特質・多様性などに関する課題も残るが、本特徴は、市場や国家を主体とした生産活動を一義的に重視する近代社会に対して、オルターナティブとしての内発的発展を提示しており、地球的意義がある。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	2,000,000	0	2,000,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	180,000	3,680,000

研究分野：地域研究 (東アフリカ)、社会開発

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：内発的発展、タンザニア、母系的社会、東アフリカ、ムウェラ、ジェンダー、再生産活動、インフォーマル

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 内発的発展論のアジア偏重

内発的発展論とは、それぞれの地域の人びとが、固有の自然環境・歴史・文化に基づいて持続的な方法で衣食住の基本的必要を充足するとともに、国際・国際格差を変革することによって自立的発展を遂げることである。その議論は、1970 年代に近代化論のアンチテーゼとして提起されたが、その事例研究・理論的展開はアジアを中心に行なわれ、アフリカにおける内発的発展に関する研究

は限られていた。

## (2) 理論研究、地域研究、政策研究の乖離

アフリカに関する地域研究には、文化人類学・生態人類学・農学・歴史学など綿密なフィールドワークに基づく豊富な蓄積があるが、内発的発展論の理論形成に貢献するものや、開発政策のあり方について具体的に切り込むような先行研究は少なかった。

他方、開発政策や国際協力に関する政策研究は既存のパラダイムを前提とした現象説

明が多く、フィールドワークの深度においても表層的なものが多かった。

上述のように、地域研究、政策研究、そして内発的発展をはじめとする理論研究の間には関連が乏しく、それらを橋渡しする研究は限定されていた。

### (3) 代表者の比較優位

本研究課題の代表者は、タンザニアにおいて開発の実践者として現場を経験してきたため、実践において前提とする開発パラダイムとその限界を実感してきた。その後、地域研究及び理論研究を重ねてきた。そういった立場から、理論研究・地域研究・政策研究を取り入れた画期的な方法で、東アフリカに関する内発的発展の事例からパラダイムの転換を試みる本課題に取り組むことが可能であると考えた。

## 2. 研究の目的

### (1) 東アフリカ小農による内発的発展の特徴

本研究は、東アフリカ、特にタンザニアにおいて小規模農業を主たる生業とする人びとに関する事例研究から、その内発的発展の可能性と特徴を明らかにすることが、第一の目的である。

### (2) 東アフリカの内発的発展の地球的意義

第二の目的は、上記の内発的発展の特徴を、他地域と比較することによって、その地球的意義を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

### (1) フィールド調査による事例研究

タンザニアの農村において、内発的発展に関連する相互扶助関係や社会構造について綿密なフィールド調査を、事例研究として行った。

- ① タンザニア南東部リンディ州 R 村における参与観察、インタビュー、聞き取り調査、グループ・インタビューや討論等 (2006 年 8 月～9 月)

〔主な研究成果については、雑誌論文①～③⑥、学会発表③～⑥〕

- ② タンザニア南東部リンディ州 M 村におけるインタビュー・参与観察・聞き取り調査、R 村における聞き取り調査・フィールドバック等 (2007 年 8 月～9 月)

〔主な研究成果については、雑誌論文①②④、学会発表①②〕

- ③ フィールド調査では、情報をフィールドノート・質問票・映像・画像として収集

した。フィールドノートや質問票等の情報は整理・分析し、雑誌論文等として発表した。画像・映像についても整理し、分析及び研究成果公表に適宜活用している。

### (2) 文献研究・情報収集による比較研究

上記事例研究を位置づけ・比較し、その地球的意義を明らかにするために、文献研究及び様々な場・方法による情報収集を行った。

#### ① 文献研究

内発的発展に関する比較研究や社会構造の理解のために本研究課題に関連する文献を精力的に収集・研究した。関連するキーワードとしては：内発的発展、タンザニア、母系、東アフリカ、ムウェラ、ジェンダー、再生産活動、インフォーマル、赤道アフリカ、社会開発、住民組織、市民社会など。

#### ② 国際会議の参加

アフリカ・モラル・エコノミー国際会議 (於福井) に参加し、研究成果を発表するとともに、アフリカ・モラル・エコノミーに関する最新の研究動向に関する情報を収集し、アフリカ各地における内発的発展に関連する最新の事例研究に関する情報を収集した (2006 年 10 月 7～10 日)。

PEKEA (Political and Ethical Knowledge on Economic Activities) の国際会議 (於ダカール) に参加し、研究成果を発表するとともに、パラダイム転換に関する情報収集を行なった (2006 年 12 月 1 日～3 日)。

TICAD (アフリカ開発会議) IV の会議を傍聴し、日本の対アフリカ政策・援助の動向、及びそれに対するアフリカ及び日本の NGO の対応に関する情報を収集した (2008 年 5 月 27～30 日)。

#### ③ 現地調査

西アフリカ (マリ・セネガル) における現地調査を通して、家畜の重要性や男女関係等の視点からタンザニア南東部の事例をアフリカにおいて位置づけ・相対化する情報を収集した。その結果、タンザニア南東部における母系的社会の特徴が際立った (2006 年 11 月 26 日～30 日、12 月 3～4 日)。

#### ④ 研究会・学会等参加

日本アフリカ学会、国際開発学会、アフリカ・モラル・エコノミー研究会、TICAD 市民社会フォーラム (TCSF) 等に定期的に参加することによって、アフリカに関する地域研究、開発学、アフリカ政策の実践に関して最新の情報を収集した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 東アフリカ小農による内発的発展の特徴

###### ① 東アフリカの内発的発展の特徴

1970年代に内発的発展の事例としてタンザニアのウジャマー政策が取り上げられ注目されていたが、政策の失敗・撤退とともにその意味は薄れつつある。また、国家単位に内発的発展の事例を見出す視点にも疑問があがっている。

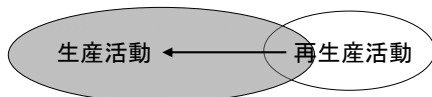
本研究課題では、そういった背景を持つタンザニアにて、周辺的に位置づけられてきた南東部における人びとの認識から内発的発展の特徴を見出している。

人びとは、「発展・開発(maendeleo)」の主体は、概ね「人びと」や「コミュニティ」などと捉えているが、「政府」や「父親」などの認識もありコミュニティ・家庭内での権力の偏重も意識している。「発展・開発」と文化の調和例としては、しばしば農業と祭が取り上げられていた。これらの活動は、「地域」の季節や収穫期と密接に関わっており、生活空間を単位とした農業などの生産活動と、人間関係を構築する祭の再生産活動との不可分な関係を示している。他方、祭などの再生産活動が開発を阻害するという視点もあるが、そのような批判にもかかわらず、祭は人びとの生活にとって必要不可欠な儀礼であり、時によって開発を差し置いても優先される。

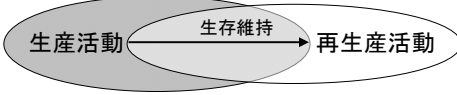
従来の内発的発展の理論においては、人間が生きていくために不可欠な基本的必要が目標の一つとして設定されていた。これと比較すると、タンザニア南東部では、再生産活動と生産活動が地域の自然を基軸として密接に関わっており、再生産活動を重視することによって、相互扶助による生存維持を保ってきた(図1:A型社会)。この特徴は、タンザニア南東部のみならず、広く東アフリカ、赤道アフリカにて共通して見られる特徴である。このような生活や価値のあり方は、人間の基本的必要の充足といった視点を超えて、I型社会(図1)に見られるような生産活動の過剰重視、生産と再生産活動の関係の再構築について示唆を与えうる。

図1:I型社会とA型社会

生産に特化したI型社会



再生産を目的とするA型社会・サブシスタンス経済



内発的発展の主体については、近年、市民社会が注目されている。他方、タンザニア南東部をはじめとする東アフリカ、赤道アフリカにおける多くの人びとの生活の中では、インフォーマルな住民組織が重要視されている。「地域」や生活空間を基盤とする住民組織は、市民社会と共通して、これまでの近代経済学・近代社会が最重要視してきた「フォーマル」な企業や国家に対するオルタナティブであり、「インフォーマル」であるという点では共通している。他方、生活基盤が共通しているという点では、いわゆる市民社会よりも持続的・安定的という利点がある一方、コミュニティ内におけるジェンダーや世代による権力構造が内在するという欠点もある。そういった点で、内発的発展の単位となりうるコミュニティや住民組織内の社会構造を明らかにすることも重要な課題である。

これら東アフリカの内発的発展に関する研究成果は、和文〔図書③〕、その詳細については英文〔図書①〕で、国内外に広く発表してきたとともに、宇都宮大学国際学部の専門科目の授業「途上国経済発展論」や「アフリカ論」にても定期的に紹介してきた。

###### ② 相互扶助の視点から

東アフリカの内発的発展の重要な要素の一つとして、相互扶助関係が挙げられる。果たして、貨幣の必要性がさらに進行する中、現代の農村社会においてどの程度、相互扶助関係が実態として機能しているのだろうか。本研究課題では、タンザニア南東部の2村において、構造的なインタビュー及び参与観察を通じてその実態を明らかにした。

まず、人びとは食物の生産など自給自足的な側面を保持している。しかし、過去と比較して、病気や食料調達のために貨幣の必要性が増加している。但し、比較的食料生産が安定しているR村と比較し、M村では食料不足は顕著であり、自給自足的な基盤をも危うくする危険性をはらんでいた。

そういった中で相互扶助関係は現存している。両村において、過去には食料を中心とした相互扶助関係であったが、現在は食料不足に陥った場合、現金のある者が臨時雇用するなど、現金と食料双方による相互扶助関係へ変化している。

但し、相互扶助関係は男女によっても異なる。例えば、R村では女性の相互扶助関係は家族・近隣関係に限定され、男性が家族・近隣関係とともに、グループ・友人関係にもネットワークを広げている傾向もある。しかし、女性独自に展開している相互扶助関係もある。また、食料の状況に関しては、男性よりも女性の方がより敏感に反応していることも明らかになった。

婚姻と所有については、男性は女性と結婚

し土地などを共同で所有しているケースが多いのに反し、女性は必ずしも全員が結婚しているとは限らず、単独で土地を所有している事例が少なくない。この点については、父系的社会とは異なる、本地域の母系的社会の特質とも考えられる。

2村にて具体的に検証した結果、貨幣の必要性が増加する中でも、自給自足的小規模農業を基盤として相互扶助関係が現存する実態とともに、食料のみならず貨幣による相互扶助関係も明らかにした。但し、食料生産の失敗による生存維持の危険性とともに、男女をはじめとする地域社会の非対称性、母系的社会の特異性なども留意する必要がある。

これらの研究成果は、英文〔雑誌論文④⑥〕、及び研究会〔学会発表①〕において国内外に発表してきた。さらに、地域研究を政策研究に応用する試みとして、地方分権化との関連についても分析し、学会〔学会発表④〕や他科研費報告書〔その他⑤〕において発表してきた。また、市民による対アフリカ援助政策の検証にも活用してきた〔その他②〕。

### ③ 社会構造の視点から

前述の通り事例としてきたタンザニア南東部は「母系制社会」と認識され、その特質や変容も研究されてきたが、母系と父系の系譜の関係については不明な点が多かった。

事例とした農村の主要民族であるムウェラ人は、母系氏族をアイデンティティの上で重要視するが、父系氏族キラワ(kilawa)も存在する。同地域の他「母系」民族の中で、氏族・民族ともにマクア人は母系継承、ヤオ人は父系継承の傾向が強いが、いずれの民族の中でもキラワの有無や継承は一貫していない。

またタンザニア南東部の人びとの姓名は、イスラム化によってイスラム名へ変化しただけでなく父系継承も強化された。婚姻は、過去に同氏族のイトコ婚等が存在したが、ウジャマー集村化以降、夫方居住、父系財産相続、男性・夫婦所有が主流となった。

氏族・民族等のアイデンティティの継承傾向と、財産相続・所有傾向を比較すると、マクア人とヤオ人の間は逆転しており、マクア人は氏族等母系継承傾向であったのに反して父系・男性所有傾向が強かった。

これまで類似民族として議論されてきた同地域の「母系」民族の母系と父系を考察することによって、ムウェラ人におけるアイデンティティに内在する二重単系、ヤオ人とマクア人との社会構造の乖離、アイデンティティと財産権における逆転を明らかにした。

その結果、父系的社会と比較して、母系的社会に特有の社会構造も存在するものの、「母系」と称される社会の中の差異も明らかとなった。母系的社会としての特質のみなら

ず、その内部の差異も認識しつつ、相続や所有に見られる現在の男女の権力構造を分析する必要がある。

これらの研究成果は、英文〔雑誌論文①②〕、及び学会〔学会発表②〕にて既に発表してきたとともに、和文雑誌論文として投稿中である。

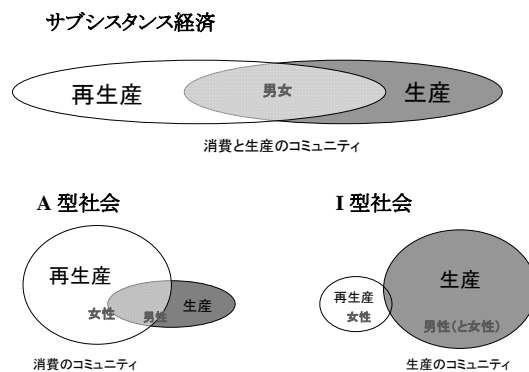
### ④ ジェンダーの視点から

東アフリカにおける内発的発展の主体として、住民組織を特徴として挙げてきたが、相互扶助及び社会構造の視点から見ても、男女間の非対称性が際立つ。本研究課題では、ジェンダー、特に男女分業のあり方を精査することによって、内発的発展の可能性と課題を明らかにした。

研究対象とした農村においても、世界の他の多くの地域がそうであったように、現金の必要性は増加しており、男女分業をも影響している。例えば、現金や換金作物のための労働は男性に限定されてはいないが、より多く担っている。他方、家事は、女性のみによって行なわれている。しかしながら、食料生産は、最も重要な仕事として位置付けられており、その仕事は、男女ともに行う。

I型社会と類型した近代社会では、男性（及び、近年においてはますます女性も）、生産領域に隔離する一方、再生産領域に女性を隔離する傾向がある。他方、本調査地の現象は、A型社会とサブシスタンス経済の組み合わせとして説明することができる（図2）。つまり、男性が生産活動をより多くアクセスしているものの生産活動は限られており、女性の再生産活動における負担が比較的大きい。しかしながら、生産活動と再生産活動をリンクさせる食料生産において男女が仕事を共有するという現状は、サブシスタンス経済の図式に沿うものである。

図2：サブシスタンス経済、A型、I型社会



以上のように、貨幣経済の影響にもかかわらず相互扶助意識が機能している本事例では、男女ともに食料生産に従事し、かつ重要視しているが、「女性が家事」「男性が貨幣獲得」という分業傾向も見受けられた。貨幣経済の浸透とともに、貨幣のために女性が男性に依存せざるを得ない構図も存在する。食料生産の重要性と相互扶助関係を維持しているが、男性と女性双方の状況改善のためには、社会経済状況に対応した変化も必要とされている。

これらの調査結果は、英文〔雑誌論文③④⑥〕で報告してきたとともに、更なる分析を国際会議や研究会〔学会発表③⑤⑥〕にて精力的に国内外に発表してきた。また宇都宮大学国際学部の専門科目の授業「アフリカ論」にても定期的に紹介してきた。

## (2) 東アフリカの内発的発展の地球的意義

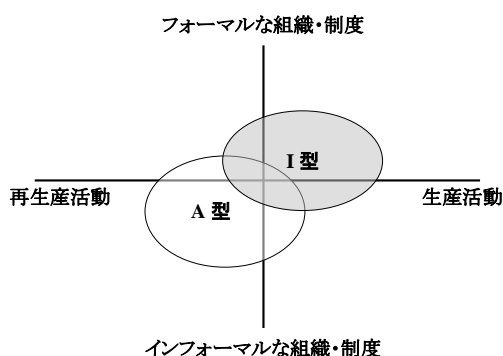
前述の通り、東アフリカにおける特徴として二点見出してきた。第一の特徴としては、人間形成のための生命再生産が重視されている点である。第二の特徴としては、インフォーマルな組織・制度が人びとの生活にとって不可欠であることが挙げられる。

これらの特徴をアフリカ・モラル・エコノミーの特徴として捉え、内発的発展論と比較すると、人間が生きるために必要な基本的必要の充足を志向し、住民・市民といった組織や主体の役割への注目といった視点は、微妙なニュアンスの違いがあるものの、呼応する側面も多い。

このことは、本研究課題を通じて実証してきた相互扶助関係の実態によっても裏付けることができた。他方、ジェンダーによるコミュニティ内の非対称性、母系的社会の特異性・多様性に関して課題は残る。

また生命再生産が重視されているにもかかわらず、地域的な食料生産の失敗など必ずしも人びとの生命が保障されていない東アフリカにおいて、モラル・エコノミーに基づく

図 3：内発的発展の主体と目的



く内発的発展の課題は大きい。このような課題に対して、倫理的観点から地球的なモラル・エコノミーの形成に対する期待も高まっている。他方、アフリカ・モラル・エコノミーを活かしながら内発的発展を実現することは、生産を一義的に捉えてきたいわゆる先進社会に対し、オルターナティブを提示するという意味で地球的な意義がある。

以上の研究成果は、和文〔雑誌論文⑤⑦〕、英文〔図書②〕、研究会〔その他⑥〕などにおいて学術的に国内外（タンザニア含む）にて発表してきたのみならず、国際学部専門科目の授業「地域研究概説」や宇都宮大学国際学研究科公開講座〔その他④〕を通して、社会に向けて公表してきた。

なお、本研究課題の主要論文は、報告書としてとりまとめ、配布した〔その他①〕。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 7 件）

- ① SAKAMOTO Kumiko, 2009, “Patrilineal Influence of Islam in Name Inheritance and Structure in Southeast Tanzania”, *Journal of the Faculty of International Studies, Utsunomiya University*, no. 27, pp.55-73. (査読あり)
- ② SAKAMOTO Kumiko, 2008, “The Matrilineal and Patrilineal Clan Lineages of the Mwera in Southeast Tanzania”, *Journal of the Faculty of International Studies, Utsunomiya University*, no.26, pp.1-20. (査読あり)  
<http://hdl.handle.net/10241/6358>
- ③ SAKAMOTO Kumiko, 2008, “Moral Economy, Cash Economy, and Gender”, *Proceedings of the 3rd International Symposium of Moral Economy in Africa*, Fukui, October 7-10, 2006, pp.125-141.
- ④ SAKAMOTO Kumiko, 2008, “Mutual Assistance and Gender under the Influence of Cash Economy in Africa, Part 2: Case study from inland rural southeast Tanzania”, *Journal of the Faculty of International Studies, Utsunomiya University*, no. 25, pp.25-43. (査読あり)  
<http://hdl.handle.net/10241/2228>
- ⑤ 阪本公美子、2007年、「アフリカ・モラル・エコノミーに基づく内発的発展の可能性と課題」『アフリカ研究』第70号、pp.133-141. (査読あり)  
<http://www.soc.nii.ac.jp/africa/j/publish/pdf/v70/133-141.pdf>
- ⑥ SAKAMOTO Kumiko, 2007, “Mutual Assistance and Gender under the Influence of Cash Economy in Africa: Case study from rural southeast Tanzania”, *Journal of the Faculty of International Studies*,

Utsunomiya University, no.23, pp.33-54.  
(査読あり)

<http://hdl.handle.net/10241/6481>

- ⑦ 阪本公美子、2006年、「赤道アフリカにおける小農のモラル・エコノミーに基づく内発的発展の可能性と課題」『宇都宮大学国際学部研究論集』第21号、pp.19-27。  
(査読あり)

<http://hdl.handle.net/10241/1962>

〔学会発表〕(計6件)

- ① 阪本公美子、2008年7月5日、「南東タンザニア農村における相互扶助と生計戦略」、日本貿易振興会アジア経済研究所、「アフリカ農村における住民組織と社会」研究会、於上智大学。
- ② 阪本公美子、2008年5月25日、「タンザニア南東部ムウェラの親族系譜—母系と父系に関する考察」、日本アフリカ学会第45回学術大会、於龍谷大学。
- ③ 阪本公美子、2007年10月27日、「アフリカ・モラル・エコノミーにおける男女分業と貨幣経済の影響—タンザニア南東部の事例から—」、2007年度アジア社会研究会大会、於津田ホール。
- ④ 阪本公美子、2007年5月27日、「東アフリカにおける地域社会と地方分権化の諸課題④南東タンザニア農村内の相互扶助と生計戦略の視点から」、日本アフリカ学会第44回学術大会、於長崎ブリックホール。
- ⑤ SAKAMOTO Kumiko, 2 December 2006, “Women and men in changing societies: Gender division of labor in rural southeast Tanzania”, Paper presented to the PEKEA (Political and Ethical Knowledge on Economic Activities) International Conference, Dakar, Senegal.  
<http://fr.pekea-fr.org/Dakar/D-T/T-D-Sakamoto.doc>
- ⑥ SAKAMOTO Kumiko, 9 October 2006, “Moral Economy, Cash Economy, and Gender”, 3rd International Symposium of Moral Economy in Africa, Comparative Perspectives on Moral Economy: Africa and Southeast Asia, Fukui.

〔図書〕(計3件)

- ① SAKAMOTO Kumiko, 2009, *Social Development, Culture, and Participation: Toward theorizing endogenous development in Tanzania*, Shumpusha, 550 pages.
- ② SAKAMOTO Kumiko, 2008, “The Moral Economy in Endogenous Development: Towards a new perspective from the economy of affection in Africa”, *Contemporary Perspectives on African*

*Moral Economy*, Dar es Salaam University Press, pp.165-179.

- ③ 阪本公美子、2007年、「東アフリカの内発的発展」西川潤他編『社会科学を再構築する—地域社会と内発的発展—』明石書店、pp.220-234.

〔その他〕(計6件)

- ① 阪本公美子、2009年、『東アフリカ小農による内発的発展の特徴とその地球的意義』2006-2008年度科学研究費補助金成果報告書。
- ② 大林稔・石田洋子編著、阪本公美子他16名(50音順)著、2009年、『TCSFアフリカ政策市民白書2007—アフリカの人びとの声は届いたか—』晃洋書房。
- ③ 大林稔・石田洋子編著、阪本公美子他5名(50音順)著、2008年、『TCSFアフリカ政策市民白書2007—アフリカ開発会議(TICAD)への戦略的提言—』晃洋書房。
- ④ 阪本公美子、2008年10月11日、「アフリカ・モラル・エコノミーによる「貧困」と内発的発展—グローバル化の波の中で—」宇都宮大学国際学研究科公開講座。
- ⑤ 阪本公美子、2007年、「東アフリカにおける地域社会と地方分権化の諸問題④南東タンザニア農村内の相互扶助と生計戦略の視点から」、笹岡雄一『サハラ以南アフリカにおけるコミュニティ参加型による「地方開発戦略」の課題と可能性』平成17-18年度科学研究費補助金研究成果報告書、pp.61-67。
- ⑥ 阪本公美子、2006年7月8日、「東アフリカにおける内発的発展の特徴とその地球的意義に関する考察」、第13回アフリカセミナー、於慶応大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 公美子 (SAKAMOTO Kumiko)  
宇都宮大学・国際学部・准教授  
研究者番号：60333134

(2) 研究分担者 特になし

(3) 連携研究者 特になし

(4) 研究協力者

渡辺 麻衣 (WATANABE Mai)  
宇都宮大学・国際学研究科・博士前期課程  
宮原 崇晃 (MIYAHARA Takaaki)  
宇都宮大学・国際学研究科・博士前期課程  
Rashid Mohammed Litunungu  
Ahmedi Abdala Mtambo  
Somoe Magaya  
Mwajuma R. Litunungu  
Mohammed Mohamedi Mpanje, VEO  
Bakari Ismaili Namumdi, VEO